



南極観測隊経験者に インタビュー



19次・26次・36次・38次・45次・53次

やまぎし ひさお

山岸久雄さん

国立極地研究所 宙空圏研究グループ名誉教授

(2016年7月現在)



南極では、どんな研究やお仕事をしたのですか？

オーロラ中にロケットを打込み、オーロラ中でどのような現象が起こっているかを直接観測する実験を行った。また、成層圏^{せいそうけん}まで上昇する大きな気球にいろいろな観測装置を乗せ、オーロラから発生する電波とオーロラ粒子から発生するX線の関係を調べた。また、オーロラの形に沿って宇宙からやってくる電波が吸収される性質を利用し、宇宙電波でオーロラの形状を調べる装置を開発し、昭和基地で観測を続けている。太陽電池や風力発電機などの自然エネルギー^{たんぱたい}電源を開発し、南極の無人観測点に一年中、安定に電源を供給する仕事も行った。短波帯レーダーの昭和基地設置も行った。



ロケットに載せる観測機の動作試験時。
第19次越冬隊（当時28歳）



初めて南極におり立ったときの感想をおしえてください。

19次隊当時の昭和基地は、最果ての工事現場、飯場といった感じであった。居住環境^{きょじゅうかんきょう}は質素で、登山のキャンプ生活と大して変わらないものであった。学生時代から、このような環境には慣れていたので、特にびっくりしたり、不満ということはなく、隊員の皆と、日々、キャンプ生活を楽しむ感覚であった。



一番印象に残ったこと・一番楽しかったことはなんですか？

印象に残ったこと：オーロラに命中したロケットから、観測データが正常に送られてくるのを自分の目で確認したこと。楽しかったこと：結婚式を挙げるひまがなかった新婚隊員の奥さんが、越冬を終えた観測隊を出迎えにオーストラリアにやってくることを聞き、隊員たちが協力して、シドニー入港中のしらせ船上でお祝いの会を開いたこと。昭和基地は観測隊員が運営する小さな町のようなのです。この町を、隊員皆が協力し、動かしてゆく中で、私たちが住む町は、このようにして維持されてきたのか、と目からウロコのことたくさんあります。隊員一人ひとりが、無くてはならない、重要な役を担っています。この、やりがいのある観測隊員に是非、なってみてください。